

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ひとりのバイオリン職人ができるまでの道

～帰国編～

池淵 考介

イタリアでの修行が一通り終わり、日本に帰国した私は、早速自分の店を持つ準備に取り掛かった。数カ月後の再びイタリアに行く日に向けて、しなければならないことは山積みであった。

しかし私にはイタリアに修行に出発した時から私を待ち続けてくれた愛しの彼女がいるため、思いの他スムーズに準備を進めることができた。

私がイタリアで修行中に、優秀な彼女は建築関係の仕事に就いていて、私の店の出店候補地を探したり、開業に必要なことを調べたりしてくれていたのである。

店の場所も決まり、資金繰りの見通しも立ったので、私は晴れて開業届を提出した。店の名前は私がイタリアの他のどのバイオリン職人にも負けない自信があるニス塗り工程から取って「アトリエ VERNICE(ヴェルニーチェ)」とした。

その後は自宅アパートで製作を続ける傍ら、店の内装工事の依頼をしたりと、多くの雑用をこなしているうちにあっという間に数ヶ月が過ぎ去った。



【コントラバス白木完成】

そして8月末、まだ夏の暑い日に私はイタリアに戻ってきた。ミラノ国際空港で、パルマの国際バイオリン製作専門学校の友人であるアルベルトが出迎えてくれた。

考えてみればイタリアで過ごした日々の中で観光といえる観光をほとんどしてこなかったので、この夏はクレモナへ直帰するのではなく、アルベルトの自宅があるヴァレーゼで休暇を過ごすことにしたのである。

快く数日の北イタリア観光案内を引き受けてくれたアルベルトの家は、ヴァレーゼの山奥の、およそ私以外には日本人が見当たらない、大自然の中のすばらしい場所にあった。とりわけ夏のイタリアは夜 9 時を過ぎてもまだ外が明るいので、本当に時間がゆっくりと流れる特別な空間であった。

翌日から、私はアルベルトに連れられてイタリアで二番目に大きな湖であるマッジョーレ湖周辺の散策に出かけた。北イタリアの夏…。山、湖、立ち並ぶメルカート、私が今まで見たことのないイタリアがそこにあった。

夜になるとアルベルトの友人たちと夜遅くまで酒を飲み、騒いだ。ヴァレーゼの古い町並み、教会、昔の洗濯場などを彼らは案内してくれた。これが彼らの日常であるのなら、これほど羨ましい生活はない。

あっという間に数日の私の休暇は過ぎ去った。アルベルトの家族には何週間居てもいいと言わ

れたが、そうもいかない。クレモナでやり残した事を終わらせるため私はヴァレーゼを後にした。

数ヶ月離れていたクレモナは私をあたたかく迎えてくれた。

荷物を置きっぱなしのアパートの大家さん。クレモナの友人、そしてマエストロと工房長。皆が「よく戻ったな」と言ってくれた。

そして到着したその日から、私のコントラバス製作が始まったのである。

コントラバス、あのバイオリンのお化けのような、チェロが子供に見えるくらいの、大きな楽器である。

日本の専門学校生だった頃の私には、こんなものを作るなんて想像もできなかった。

型からして巨大で重量のある、まさに家具を作っているような感覚であった。

ただ、これまで沢山の楽器の製作現場を目にしてきた私にとって、木工作业自体は難しいものではなかった。

工房内でも修行中に幾度かコントラバス製作に携わっていたので、技術面では問題はない。むしろ私にとって重要であったのは各箇所の数値を覚えることと、作業を体に覚えさせることであった。

製作期限はクレモナの弦楽器展示会、MONDO MUSICA CREMONA の開催される10月はじめ。よく考えるとのんびりヴァカンツァなどやってる時間はなかったのである。

後はまた、いつもの嵐のような日々である。朝早くから夜遅くまで、手を動かせばどんどん形になって行くのが嬉しかった。

さすがにこれほど大きなものを作るのだから、余計な木を取り除くには電動工具を使用したのだが、最終的に完成させるのは自分の手なので、体でぶつかって行く他ない。ただし、工房長や同僚のコントラバス・マスターのドイツ人がより効率の良い作り方を教えてくれたので、システム化された彼らのノウハウを全てコピーすることにより、製作時間を大幅に短縮することができた。

最難関はネック入れとペグの歯車の取り付け工程であったが、工房長の教えをしっかりと聞き、次回以降は全部自分ひとりのできるように全ての

ポイントをメモしていった。

その傍ら、まだコントラバスのモデルを持っていなかった私はマエストロに頼み込み、彼の義理の父の代から使用している工房のオリジナルモデルを、他の誰にもコピーさせないという条件の下に入手することができた。

これにより、私は日本でもたった一人でコントラバスを製作することが可能となったのである。

そして9月末、私は晴れてコントラバスを一本作り上げた。この大きな仕事をやり遂げた私は、これでようやくクレモナを卒業できるという実感を得た。マエストロや工房長、それに支えてくれた沢山の人がいたからこそ出来た事である。皆には本当に心からの感謝あるのみだった。



【クレモナ生活終了】

MONDO MUSICA CREMONA も終わり、夏の終わりの肌寒い風が吹き始めた頃、私はアパートにまだ残っていた物を全て日本に送るため引越しの準備を始めた。

他の日本人の先輩たちは、自分でコンテナを借りたり格安の運送会社を探したりしていたが、私

はより安全で確実なクロネコヤマトの海外引越サービスに依頼することにした。

バイオリン製作用の巨大な机を2つと電動工具など重量物の多い私の引越しは、個人ではどうしようもなかったのので、費用よりも確実性を優先させたのである。運送代は30万円超になったが、日本では買えないものばかりなので、考える余地はなかった。

あとは材料の購入である。バイオリンを製作するための材料の買い込みと、修理に使用する特殊な工具の買出しのためにあちこちを回った。特にニス材料は、日本でも買えるものの非常に割高なので買いためをする必要があった。一度帰国するとなかなか戻って来られないことは覚悟していたので、この引越しの機会に必要なものを全て送ることにしたのである。

そして引取りの日。私が5年間過ごした部屋は綺麗さっぱり、元からあった家具だけになった。

クレモナでのこれまでの日々が全て消えてなくなってしまったようで少し寂しかったが、運命だと受け入れる他なかった。

そして11月はじめ、日本の弦楽器フェアが開催されるタイミングで私は帰国することになった。

まだ数週間、滞在が可能ではあったが、マエストロが日本に行く時に同行した方が都合がよかったからである。

出発の日、皆と別れの挨拶を交わしたのだったが、「どうせお前はまたすぐ戻ってくるんだろ？別にもう会えないとは思ってないよ。」と言われたので、私もそのつもりだと返事をした。

次はいつ来られるか分からなかったが、また機会はあるだろうと思うと特に寂しくはなかった。今度はもっとゆっくり観光したいという思いを告げて、クレモナを後にしたのであった。

さて、成田国際空港に到着したら、私にはまずやらなければならないことがあった。

それはイタリアに留学を始める前からずっと待ち続けてくれた彼女へのプロポーズである。

完全に帰国したら結婚しようと以前から話していた私たちにとって、成田に迎えに来た彼女に私がプロポーズすることをもって、私のイタリアでの

修行の終了と日本での生活の始まりの節目にしたいと考えていたからだ。

成田到着後、私は緊張しながら彼女を探した。すると、私を呼ぶ声がある。しかし彼女の声ではない。

私を呼んでいたのは、とある顔見知りの超有名マエストロであった。同じ便で一足先にゲートを出ていたのであろう。こちらの事情など知らぬ彼は、あろうことか私にタクシー呼んで来るよう指示したのである。なんととも間の悪いことに、同じタイミングで彼女を見つけた私は、マエストロへの挨拶をそそくさと済ませると、彼女の元へ駆け寄った。

そして、「完全に帰国したからこれからはずっと一緒に居られる。結婚しよう」とプロポーズをしたのである。彼女は、「よろしく願います」と答えてくれた。プロポーズは無事成功したのだった。

ただプロポーズ中もマエストロがずっと私を呼び続けていたので、少々邪魔された感がなきにしもあらずだが、これはこれで愉快な思い出。

以上が私のクレモナでの修行の全てである。今になって思い返せば沢山の偶然と出会いがあり、逆境に苦しむこともあったが、それらの全てが私にとっては貴重な経験となった。

どんな時でも負けない執念があれば人生がどんどん良いものになっていくことを体感した5年間であった。

将来何が起きるかは分からないが、今後一生バイオリン製作を続けることでクレモナでの経験がずっと私の中で生きていくのであれば、これほど幸せなことはない。

その経験を生かして、演奏者の方々に常に満足していただける楽器を作ることが今後の私の人生をかけた課題である。

< バイオリン専門店 アトリエ VERNICE >

HP: <https://www.ateliervernice.com/>

e-mail: atelier.vernice@gmail.com

(バイオリン専門店 アトリエ VERNICE 代表・
当館元受講生)

ローマ滞在日記⑫

フォッソリへ続く一本道

二宮 大輔

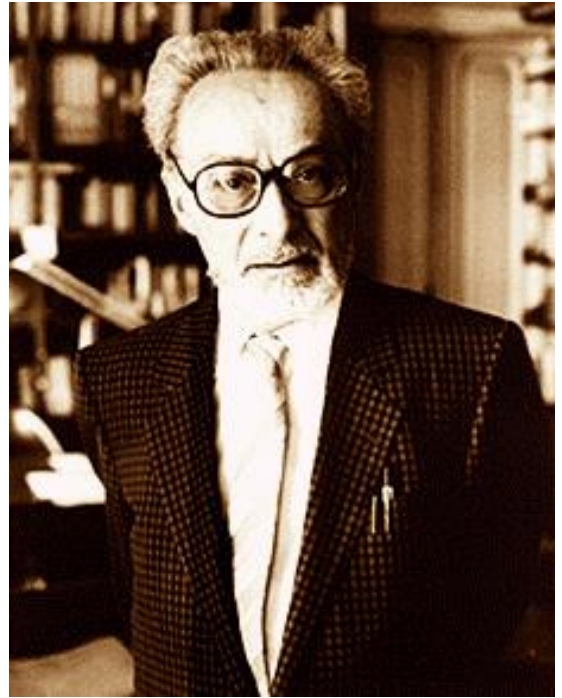
1年ぶりにイタリアに来ている。今はローマの友人が経営している簡易宿の一室で、この文章を書いている。国鉄オスティエンセ駅の裏手に位置しているのだが、5年前に巨大食料品デパート Eataly がオープンして以来、この地区にはレストランやピザ屋が乱立し、少し来ないうちにすっかり飲食店激戦区になっていた。

そんな場所の師走の賑わいもなんのその、私は部屋にこもって孤独なデスク・ワークを続けている。というのも、完全に自分のせいではあるのだが、文芸書を翻訳中で、11月末の提出期限に見事に間に合わず、諸々の原稿とともにイタリアに持ち込んでしまったのだ。まだ発売日が決まっていないので作品名などの詳細は差し控えるが、プリーモ・レーヴィ関連の本だ。

日本では竹山博英先生の翻訳などでご存知の方も多いただろうプリーモ・レーヴィ。1919年トリノで生まれたユダヤ系イタリア人作家で、第二次世界大戦後期にレジスタンス運動に参加したことで逮捕され、アウシュヴィッツ強制収容所に送られた。その過酷な収容所生活を奇跡的に生き抜いた後、その体験記として『アウシュヴィッツは終わらない——あるイタリア人生存者の考察』(原題は *Se questo è un uomo* で、「これが人間か」の意)を発表した。私が現在翻訳しているのは、レーヴィの作家としてのキャリアの初期から、体験記に留まらずフィクションや詩集も発表した後期まで、各作品のモチーフや意味を、著者の残したインタビューをもとに解説したもので、全作品を含むがゆえに、相当な分量になっている。

本来なら翻訳を提出してから心置きなくイタリアに来て、レーヴィゆかりの地を回ろうと思っていたのだが、同時進行するはめになってしまった。と

いうわけで関西空港からローマに到着し、イタリアを縦断して再びローマの宿に帰ってくるまで、飛行機で、ユースホテルで、駅のベンチで、パソコンのキーボードを叩き続けて過ごした。そんな中でも、翻訳する上での活力になる素晴らしい出会いや発見が多数あったのだが、レーヴィがアウシュヴィッツ以前に収容されていたフォッソリの収容所の見学がとても印象的だったので、それをここに書き留めておきたい。



【プリーモ・レーヴィ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Primo_Levi

まず、あまり知られていないフォッソリという町であるが、人口4千人ほどで、エミリア・ロマーニャ州のモデナ県カルピから北5キロに位置している。ちょうどヴェローナとボローニャの間くらいだ。その町の外に、今回の目的地である元収容所がある。この辺りの土地勘がさっぱりなかった私は、中継地としてモデナに宿をとったのだが、そこから電車で15分のカルピもかなり整備された清潔な町なので、収容所に興味のある人はここを拠点に動くともよいかもかもしれない。しかもカルピには、フォッソリ元収容所財団(Fondazione ex Campo Fossoli)が事務局を構えており、町の中心の広場にある追放歴史博物館(Museo monumento al

Deportato)とフォツソリの元収容所は、基本的に財団で予約をし、ガイド付きで見学することになっている。

19世紀にはシナゴグとして使用されていた趣のある建物に入っている財団事務局を訪れた私は、その日収容所が一般公開されていないことを告げられたものの、とりあえず現地までの行き方を教えてもらった。通常の見学者は車で移動することが多いらしく、担当してくれた職員も行き方をよく分かっていない様子。グーグルマップによると、北の方角に徒歩で1時間6分と出た。これは頑張れば歩けるなど算段したところで、私のアドレナリンは全開になった。

お金はないけれど、時間だけはあった留学時代、イタリアの数々の僻地を徒歩で踏破したあの頃の感覚が、三十半ばを過ぎた今、ふつふつと蘇ってきたのだ。後で調べたところ、カルピ市内からフォツソリ行きのバスも一時間に一本出ているのだが、完全に徒歩で行く決意が固まっていた私は、近くのパールで非常食用のパニーノを買い、広大な平原を抜ける一本道を、収容所に向けて突き進んでいった。

町と町を結ぶ郊外の自動車道には、基本的に歩道部分がなく、車がびゅんびゅん通り過ぎる真横を歩くことが多いのだが、カルピ＝フォツソリ間には幅の広い歩道があり、時には散歩やジョギングを楽しんでいる人ともすれ違う。歩くと決めた当初は、かなりの冒険になるぞと気負っていたのだが、少し拍子抜けしてしまった。さらに、こんなところに忌まわしい収容所があるのかと首をかしげたくなるほど、辺り一面、牧歌的な風景が広がっている。そして歩くこと約1時間、のどかな田舎道の途中にお目当ての収容所が現れた。

運がいいことに、フォツソリ財団のガイドが中で案内をしているらしく、収容所の門が開いている。入口で待っていた職員の人をお願いして、少しだけ中に入れてもらった。崩れかけのレンガでできたバラックの残骸がいくつも並んでおり、その内部には雑草が生い茂っている。6ヘクタールのこの土地に強制収容所ができたのは1942年。当初はイギリス人捕虜のための収容所だった。翌年、ナチスが北ヨーロッパに鉄道で囚人たちを運ぶ中継地としてこの地を使用する計画が持ち上がり、

ムッソリーニが統率するイタリア社会共和国のもと、イタリア在住のユダヤ人たちが収容され始める。1944年に入るとナチス親衛隊の直接支配となり、政治犯とユダヤ人はここを介して北ヨーロッパのさらに厳しい強制収容所、絶滅収容所に送られることとなった。フォツソリの収容所からカルピの鉄道駅に移送され、そこから主にアウシュヴィッツに向けて列車が出発する。その第一号の列車にプリーモ・レーヴィも乗っていたのだ。フォツソリが通過収容所として利用されたのは約7か月。安全を期すために、同年8月、さらに北にあるボルツァーノに収容所は移されたのだが、この7か月間で北ヨーロッパに移送された囚人は5千人、そのうちの半数がユダヤ人だったという。



【フォツソリ元収容所】

興味深いのは、戦後に辿った収容所の運命だ。1947年から5年間にわたって、使徒言行録をもとに、新たな生活を共同で行うカトリック団体ノマデルフィアが、この地を占拠する。さらに1953年から1960年代の終わりまではサン・マルコ村と名づけられ、ダルマチアやイストリアのイタリア人難民を受け入れた。つまり、ユーゴスラビアの侵略により、イタリア領ではなくなったアドリア海岸トリエステ周辺地域のイタリア人たちが、フォツソリに移住してきたのだ。

1970年代に入ると、カルピの追放歴史博物館が、収容所の歴史的価値を主張し、経済的援助を市に要請。1984年に市の所轄管理となった。このように、戦後も大きな動きが度々あったため、1942年当時から現存しているのは、バラックの一部の壁のみなのだが、その変遷からは、第二次

大戦後のヨーロッパのダイナミズムも読み取れる。また、日本語ではフォツソリ通過収容所(Campo di transito)というのが一般的だが、イタリアでは当初の使用目的通り、強制収容所(Campo di concentramento)の名称で残っていることも分かった。

収容所内に入れてくれた職員にお礼を言ってフォツソリを後にし、再び徒歩でカルピを目指す。アウシュヴィッツ行きの列車に乗せられるために、5千人の囚人がこの道を移送されたのだろうか。当然のことながら、この田園地帯と同じく、イタリア中が戦争の舞台となった過去があり、注意深く観察すれば、その痕跡はまだいくらかでも発見できるだろう。そんなことをぼんやり考えながらカルピまでの道を歩いた。



【1942年当時のフォツソリ収容所】

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Campo_attendato_per_prigionieri_inglesi_1942_-_PG73.jpg

さて、ローマに帰ってきて、今一度プリーモ・レーヴィと向き合ってみる。アウシュヴィッツから生還した1946年、彼はフォツソリのことを思い出しつつ、短い詩を書いている。タイトルは『フォツソリの夕暮れ』(Tramonto di Fossoli)だ。

帰れないことが何を意味するか知っている
有刺鉄線越しに
太陽が沈み死ぬのが見えた
肉を引き裂かれる気分だった
いにしえの詩人の言葉は
「太陽は沈んでも再び昇ることができる
我々には、短い日が消えれば
終わらぬ夜はただ眠るためのもの」

Io so cosa vuol dire non tornare.
A traverso il filo spinato
Ho visto il sole scendere e morire;
Ho sentito lacerarmi la carne
Le parole del vecchio poeta:
“Possono i soli cadere e tornare:
A noi, quando la breve luce è spenta,
Una notte infinita è da dormire”.

彼の創作活動の最初期の作品であるこの詩からは、この先の運命をすでに暗示しているような、歴史的悲劇の前夜の雰囲気伝わってくる。

『コツリエーレ・デラ・セーラ』紙の記者ジュリオ・ナシンベーニが行ったインタビューで、レーヴィは「当時、自分の中で重みになっているものを表現するには、散文よりも詩のほうが適していると思いました」と語っている。戦争やユダヤ人迫害への、得も言われぬ不安は、記録文学ではなく詩という形で表現したかったということだろうか。

とにかく、自分なりにフォツソリを体験した私は今、レーヴィの詩心に少し近づけた気分になっている。この感覚を胸に、件の文芸書の完訳を目指したいと思う。

(翻訳家/当館元受講生)

イタリア語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

1/8(月) 11:00~12:30

1/13(土) 11:00~12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

1/11(木) 19:00~20:30

● 大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

1/16(火) 19:00~20:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>